名古屋芸術大学キャリアセンター紀要　第10号　121～131頁（2021）

コロナ禍における「音楽表現」科目で試みたオンライン授業の実践例と一考察

―学生の授業アンケートから見えたもの―

A Study of Practical Examples of Online Lessons Tried in the "Musical Expression" Subject in the COVID-19

― Based on the Results of the Students Questionnaire ―

原田　慎也　*HARATA Shinya*

Ⅰ．はじめに

日本のみならず、世界中が未知のウイルスと呼ばれる新型コロナウイルス感染症（COVID-19）と対峙せざるを得なくなってから早一年。医療界での混乱は言うまでもなく、政府による一斉休校の要請や感染対策の一環として唱えられた、いわゆる３密回避のため、換気やソーシャルディスタンス（社会的距離）の確保に翻弄されながらの授業は、教育界に大きなダメージを与えた。そして、追い打ちをかけるかのように、オンラインでの授業をも余儀なくされたことで現場は煩雑となり、学生も教員も様々な面において不便を強いられ、苦しくも、多くを学ぶ年となった。

早くから在校生との連絡手段として電子メール等の媒体を使用し、また、オンラインでの授業を積極的に行っていた教育機関では、この未曾有の混乱期においても早急な対応策を講じた。しかし、大半の教育機関では、新学期と重なったことで更なる混乱に陥ることとなり、結果、特に新入生への対応に大変な時間を要した。

そのような中、実技が主体となる授業科目では、この前代未聞とも言える苦境に立ち向かうべく、授業展開や進め方など、これまでとは違った工夫が教員に猶予なく求められた。音楽系科目も、その一つに他ならない。

今回は、筆者の所属している保育者養成機関の一つ、名古屋こども専門学校（以下、「名古屋こども校」とする）での授業「音楽表現Ⅳ」において、実際に行ったオンライン授業の実践例とその試みについて、学生の授業アンケートから得られたデータを基に考察していきたいと思う。

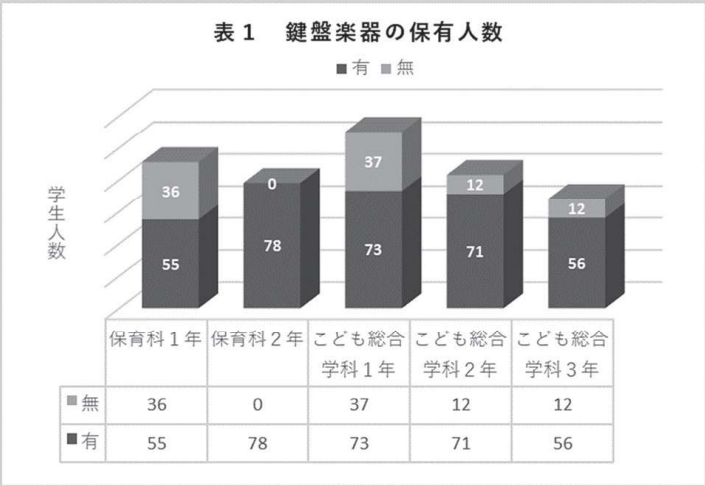
Ⅱ．研究動機と目的

先に述べた通り、筆者の所属機関の一つである名古屋こども校では、「音楽表現」と呼ばれる音楽系科目が、Ⅰ～Ⅶと段階的に学べるよう設定されており、この中でⅡと設定されている音楽理論中心の講義科目以外は、対面による弾き歌い指導を中心としたピアノの個人レッスン（バイエル教則本やリトミック指導を含む科目もある）を教授する。筆者は、この個人レッスンの科目を担当していたため、所属機関のシラバスに則り、弾き歌い曲の

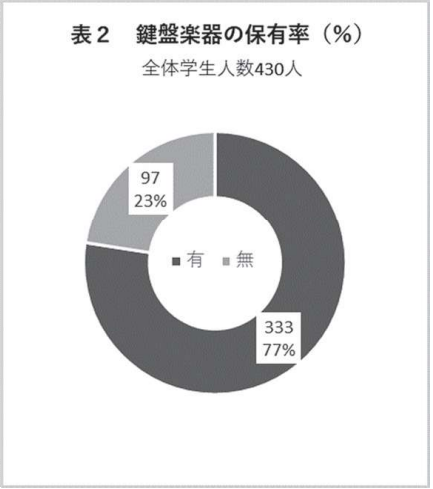
みをコロナ禍直前までは対面にて指導していた。

だが今回、再び11都府県へ２度目の緊急事態宣言が発出され、また、所属機関の方針に従う形で、筆者の担当する「音楽表現Ⅳ」もオンライン授業への急転換を余儀なくされた。これに伴い、これまでの個人レッスンとは全く違った授業展開が求められた。感染対策など、様々な不自由はあったとはいえ、つい昨日まで対面にて行っていた弾き歌いの指導を、どのようにしてオンライン授業へ切り替えれば良いのか、次の授業日を翌週に控え焦りつつも熟考した末、弾き歌い曲の学びと関連付けられる童謡曲を題材とした紙芝居制作と手遊びの授業を行うことにした。

もちろん、弾き歌い技術の向上を目的とした科目において、紙芝居制作や手遊びを取り入れることで授業内容に変更が伴うことに躊躇がなかった訳ではない。しかし、これらを選択した理由としてまず第一に、全学生430名のうち97名、およそ全体の23％にあたる学生が鍵盤楽器を所有していないと事前アンケートで明らかとなり、オンラインでのピアノ個人指導は現実的でないと所属機関より判断されたことがあった。補足ながら、2020年度の名古屋こども校の学生の鍵盤楽器所有率は、以下の表の通りであった。



	保育科１年	保育科２年	こども総合学科１年	こども総合学科２年	こども総合学科３年
■無	36	0	37	12	12
■有	55	78	73	71	56



余談にはなるが、他の保育者養成機関では、一定数の学生に対しキーボード等の貸出しを行い、オンライン授業においてもピアノの個人レッスンを問題なく遂行したと聞いた。しかし、名古屋こども校では上記の表でも示した通り、鍵盤楽器未所有の学生が多く、そういった対応は見送られた。

第二の理由として、双方向のライブ配信によるリアルタイム型授業であること、且つ、受講する者の公平性を担保した授業展開であることを所属機関より強く示されたことなどがあった。そのため、鍵盤楽器所有の有無によって生じ兼ねない指導の格差をなくすべく、個人レッスンは行わず、講義形式での授業へ転換せざるを得ないという考えに至った。

加えて、国の幼稚園教育要領を参照すると、保育での音楽は領域の「表現」に含まれており、この「表現」という言葉は、筆者の担当する科目名にも含まれている。このことは

筆者に、所属機関のシラバスに則って授業を進めているとはいえ、この授業は弾き歌いの個人レッスンだけで果たして良いものか、と疑問を抱かせ、機会があれば表現に結び付けられる取り組みを学生に体験させられないか、と常々考えさせた。また、日々の学生とのレッスンを通し感じていた、彼等の弾き歌い曲に対する親しみの度合いや理解度についても、指導する側として不安を拭えずにいた。

今回、以上のような点、また、緊急事態により所属機関から科目を担当する教員各々に授業内容は一任されたことなどから、筆者はオンライン授業への転換を機に学生の弾き歌い曲に対する認知度や理解度、意識自体を少しでも高められないかという目的と、表現に繋がる音楽活動ができないか、という観点を踏まえ、紙芝居の制作や手遊びを授業に取り入れた。

Ⅲ、実践例と考察

⑴　実践例

紙芝居制作、手遊びのオンライン授業は、2020 年度の通年授業全 30 週中のうち、５週に渡り以下の通りで行った。尚、対象者はこども総合学科２年生のうち、筆者が担当していたクラスで「音楽表現Ⅳ」を受講した２７名。

表３　オンライン授業の日程

週	授業内容
第１週	**任意の弾き歌い曲で紙芝居を描こう** ・紙芝居制作に至った経緯や目的ついての説明 ・制作においての条件や留意点などを提示 ・今後の流れについての説明
第２週	**学生の選択曲や進捗状況などの確認** ・個々の進捗状況を確認しながら制作途中で感じた疑問、質問等を受け付けクラス全体で共有
第３週	**紙芝居の発表 と まとめ**
第４週	**「グーチョキパーでなにつくろう」でオリジナルの歌詞と手遊びを考えよう** ・前回授業の振り返り、FB（フィードバック） ・課題の提示と目的などの説明、自主学習(構想及び発表に向けた練習時間)、発表
第５週	**「すうじのうた」でオリジナルの歌詞 及び ペープサートを作ろう** ・前回授業の振り返り、FB（フィードバック） ・課題の提示と目的などの説明、自主学習(構想及び練習、ペープサート制作時間)、発表

課題の説明は、学生がスマートフォンでも見やすく聞き落としがないように、パワーポイントによるスライドを用意し行った。発表はオンライン授業時間内に各自のカメラ、マイクを起動させた状態で行うことを条件とし、選曲については、「こどものうた 200」及び、「続・こどものうた 200」（以下、「教則本」とする）からとした。

紙芝居制作の授業では、事前に筆者が教則本から選び童謡曲に合わせ用意した紙芝居を、曲の旋律に合わせて歌いながら発表する形を手本として学生に見せ、発表までの流れを掴んでもらうようにした。また、紙芝居の制作条件は以下の通りとした。

・教則本から任意の一曲を選択し、その曲に合わせた紙芝居を制作すること
・なるべくＡ４用紙を使用すること（後日の提出や回収を考慮して）
・４コマ漫画のように４枚で完結させること
・子どもたちに温かみが伝わるよう手書きにすること
・オンライン授業での発表を考慮し、色付けは濃い目に見やすく仕上げること
・同じくオンライン授業の特性を考慮し、発表時には滑舌良くゆっくりと歌うこと

手遊びの授業では、「グーチョキパーでなにつくろう」、「すうじのうた」の２曲を課題とし、まず、「グーチョキパーでなにつくろう」では、１番から３番までを教則本に記載されている歌詞、楽譜通りに練習してもらい、４番目の新たな歌詞としてオリジナルの歌と手遊びを学生に自由に付けてもらった上で、発表時には１番から通して歌ってもらうことを課題とした。

「すうじのうた」では、個々に任意の数字を一つ選択してもらい、加えて選んだ数字のペープサート（うちわ型の紙人形）を制作、発表するという課題とした。その際、曲の旋律から大きく外れたり、語呂合わせに問題がなければ、数字の桁数に制限は設けない旨を伝え、好きな数字を選ぶよう促した。また、教則本に記載されている歌詞は自習時間に例題として各自予習し、学生はそれらを参考に自由に考えたオリジナルの歌詞を自作のペープサートと共に発表する形とした。尚、ペープサートを制作するにあたり、「グーチョキパーでなにつくろう」の手遊びの授業終わりに、ルーズリーフ等の白い紙、割り箸やアイスキャンディー等の棒、セロテープや糊、色鉛筆等、自宅にあるもので良いので使えそうなものを用意しておくよう事前に告知した。

また、それぞれの取り組みの際には保育の五領域にも軽く触れ、紙芝居制作や手遊びの学びが、どのような点でそれらと結びつくかをクラス全体で話し合い、共有した。

⑵　学生の課題に対する創意工夫

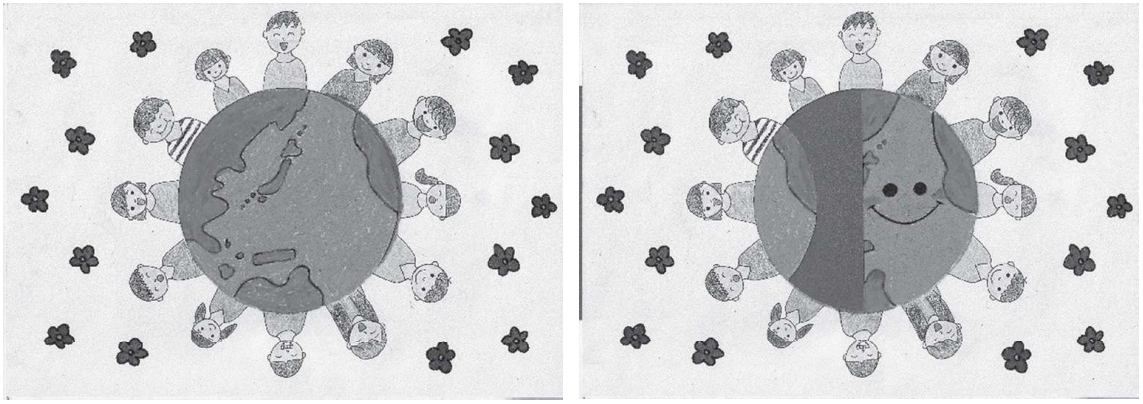
コロナ禍において、学生たちは本当につらく大変な時間を過ごしたに違いない。オンライン授業ばかりで初登校すら許されない新入生や、それに伴い友人関係をも構築できないという不安。そのような状況下で、我々教員の間で度々話題となったのは、今年の学生たちには創意工夫が多分に見られた、ということであった。

以下の添付資料は、対面授業が再開された際に、学生に提出してもらった紙芝居及びペープサートの画像であるが、実に様々な工夫やアイディアを取り入れたものが多かった。先

に述べた通り、紙芝居制作では任意の弾き歌い曲を選択し、その曲の紙芝居を歌いながら発表してもらった訳だが、それらに色々な仕掛けや工夫を駆使し仕上げた理由について、どのようにしたら子どもたちに楽しんで見てもらえるのかを考えながら制作した、と多くの学生が課題発表時や提出時に語った。

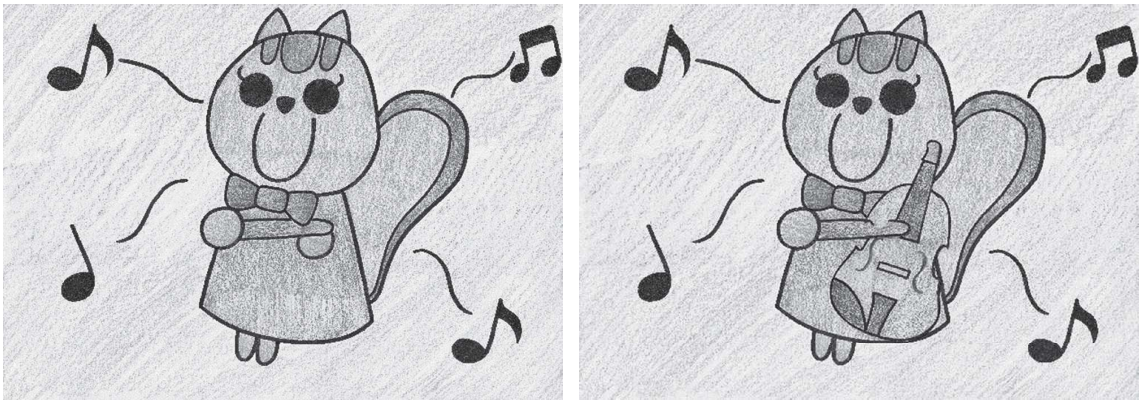
尚、本研究への資料の添付にあたっては、各学生に許可を得た上で、個人が特定されないよう倫理的配慮を行った。

（資料１）



資料１は、「世界中のこどもたちが」の楽曲を題材に制作されたもので、サンドウィッチのような３枚構造になっている。１番の歌詞、『世界中の子どもたちが一度に笑ったら 空も笑うだろう ララララ 海も笑うだろう』[1] に合わせて、ちょうど真ん中にあたる２枚目の絵を横へスライドすることにより、笑っている地球が顔を出すといった仕掛けで、作者の学生は、歌とのタイミングに気を付けながら発表した。また、２番の歌詞に合わせて泣いている紙芝居も用意されていた。

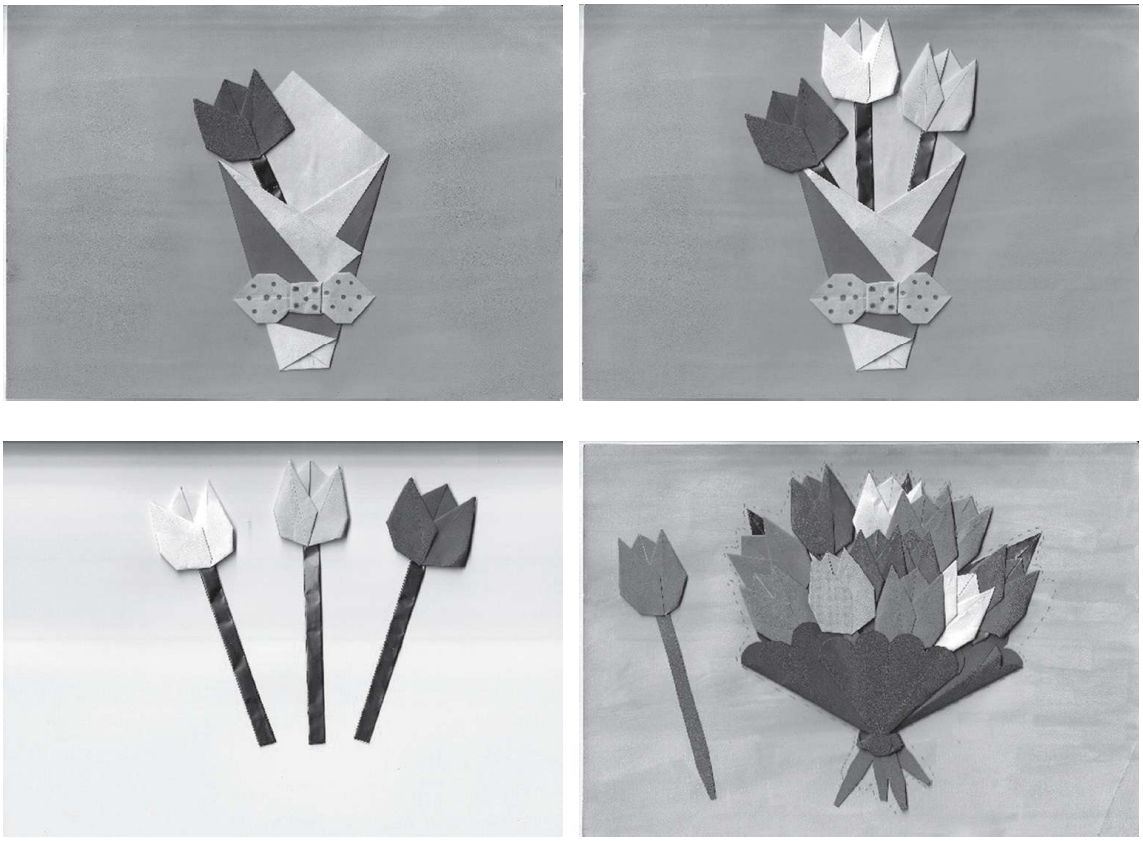
（資料２）



資料２は、「やまのおんがくか」を題材に、リスがバイオリンを弾くという１番の歌詞に

合わせて楽器を型取った素材を挟み込める仕掛けが施されていた。この作品では、リスの右手に持っている弓にあたる部分に切れ込みが入っており、そこへバイオリンを型取った素材を挟み込めるように工夫されていた。他にも、２番以降の歌詞に合わせピアノやフルートを型取ったものが用意されていた。

（資料３）



資料３は、選曲自体は誰もが知る「チューリップ」ではあるが、全て折り紙で作られた独創的な作品となっている。

表３でも示した第２週の授業で、実はこの作者である学生から次のような質問があった。それは、『手書き以外の紙芝居は認められないか』というものであった。制作の条件は第１週の授業で示した通りであったが、それは幼い子どもたちが見たと仮定したときに温かみが伝わるようにして欲しい、例えばパソコンやスマートフォンなどを使用した作風は避けてもらいたい、という意図であったと筆者が答えると、その学生は妙に納得した様子であった。それが、このような非常に凝った作品へと繋がったのだから感心するほかない。

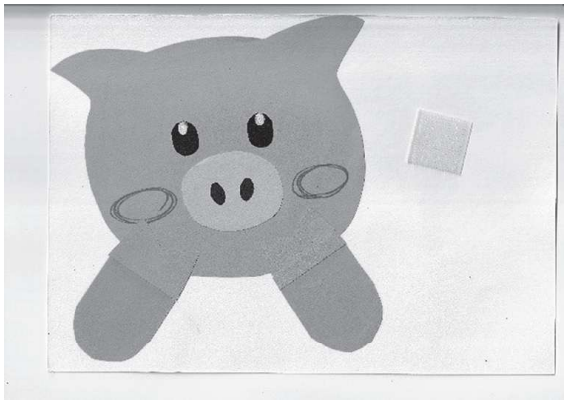
発表そのものも見事で、折り紙で作られたチューリップは、台紙に貼り付けられているものと、そうでないものが存在し、歌の『あか しろ きいろ』[2] に合わせて、折り紙でできたチューリップを挿し足しながら花束を作ってみせた。また、『どの花みても きれいだな』[3] のくだりでは、折り紙のブーケを作り、オンライン上での発表ではあったが、クラ

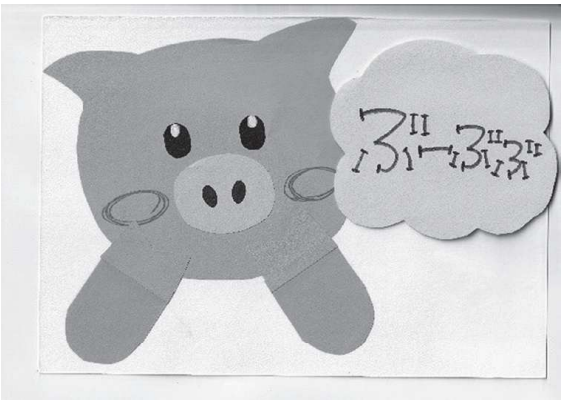
スメイトの注目を集めた。そして筆者を更に驚かされたのは、これが、これまでの弾き歌いの授業中では、どちらかというと消極的な学生であったことだ。

（資料４）

資料４は、「にんげんっていいな」を題材にした作品だが、この作者である学生には、紙芝居の上部を脱着可能なリングで留め、歌いながらでも紙芝居をめくり易いような工夫が見られた。また、動物が手を振る動作として、小熊を型取った自作のペープサートを用意していた。驚いたのは、このペープサートにラミネート加工が施されていたことだった。

（資料５）





資料５は、「こぶたぬきつねこ」の作品で、この作者である学生は、歌詞の中にある動物の鳴き声に合わせて、紙芝居の裏側に取り付けてあるポケットから吹き出し素材をサッと取り出し、歌に合わせて貼り付けていくという発表をした。添付画像では確認しづらいが、子豚の右側に簡単に吹き出しが脱着できるよう、マジックテープの仕掛けが施されている。

（資料６）

資料６は、「すうじのうた」のペープサートである。前述の表３でも示した通り、課題発表は授業当日であったため、構想から制作、練習、発表までを、とても短い時間内で取り組む必要があったが、多彩な色付けや美しい仕上げ方など、学生の意欲的な姿勢が見られた。

以上のように、どの作品においても彼等の豊かな感性や個性を感じずにはいられなかった。また、紙芝居制作の取り組みでは、表３でも示したように、第４、５週の手遊びに比べれば、発表までに時間的余裕はあった。ただ、学生の発想力や様々な工夫、作品に対する熱意だけを単純に評価しても、感心させられることばかりであった。そして今回、画像を添付することはできなかったが、「グーチョキパーでなにつくろう」の手遊び発表では、左手のグーに右手のパーを乗せ回しながら『ヘリコプター』と歌ってくれた学生や、『左手はパーで右手はチョキでラーメン、ず～るずる～』と、歌詞の最後にオノマトペ的効果音を付け、発表時にクラスメイトの笑いを誘った想像力豊かな学生などがいたことも付け加えておきたい。

⑶　学生の弾き歌いに対する意識変化

学生の弾き歌い曲やその技術向上に対する意識は、残念ながらこれまで高いと感じることは幾度もなかった。もちろん、実技試験の直前には真剣に取り組む学生もいるし、少数派ではあるが、非常に真面目にピアノの練習をしてくる学生も中にはいる。しかしながら、これまでの対面による個人レッスンの中で、学生の弾き歌い曲に取り組む姿勢や練習状況から見ても、その技術を意欲的に学ぼうとしている学生が多いとはお世辞にも言えなかった。また、保育の現場で弾き歌いのスキルが必要なものであると、どれほどの学生が理解してくれているのかを量る自信も、筆者には正直なかった。

しかし今回、弾き歌い曲に関連付けた紙芝居制作や手遊びに取り組んでもらったことで、多くの学生は「何か」を感じ取ったようだ。つい先ほども述べた、弾き歌いのスキルが保育者にとって必要不可欠なものであることを、今回の授業を通してどれほどの学生が直接的に感じ取ってくれたかどうかは定かではない。ただ、音楽や音楽を通して表現をすることが、幼い子どもたちにとっていかに重要で大切な時間であるか、また活動になるのかを、改めて感じてもらう良い機会になったことは間違いない。そして、弾き歌い曲を少しでも身近に感じてもらえたのではないかということは、以下の学生授業アンケートからも読み取ることができた。

尚、アンケートは「今回の授業で学びになったことについて述べよ」という設問に、学生が自由記述で答えるもので、それぞれの取り組み（授業）に対して行われた。

表４　紙芝居制作の授業に対するアンケート結果

	プラス面・前向きな回答	マイナス面・後向きな回答
記述回答内容の一部	・ピアノの授業がオンラインでどんな感じになるのか不安だったが紙芝居制作はわかりやすかった ・楽譜から想像するのは難しいと思ったが楽しかった ・ピアノの授業で紙芝居を作るのは予想外だったが改めて歌詞の意味やその曲からどういった印象を受けるのか何を伝えたいのかを考えることができた ・紙芝居で選んだ曲を弾けるようになりたい ・ピアノは苦手だけどこれからは頑張ろうと思った ・ピアノの授業でなんで紙芝居と思ったが先生の発表のお手本を見て絵を見ながら歌うと視覚的にも楽しめて良いと思った	・オンラインだと授業の実感がわきにくいと思った ・オンライン上での発表は難しかった ・発表は苦手なので少し憂鬱です ・周りの反応がわからないのが少し不安だった
回答数	20	4

表５「グーチョキパーでなにつくろう」の授業に対するアンケート結果

	プラス面・前向きな回答	マイナス面・後向きな回答
記述回答内容の一部	・子どもたちが楽しめるにはどうしたらいいかを考えながら手遊びを学べた ・アレンジ次第で手遊びのレパートリーを増やせる ・クラスメイトの発表に刺激を受けた ・弾き歌いも頑張ろうと思えた ・実習や保育の現場で絶対に役立つと思った ・簡単に楽しめる凄さを改めて感じた ・五領域を意識しながら課題に取り組むことができた ・楽しかった ・将来働く際に必要になることなので授業はとても良い機会だった	・タブレットの調子が悪く授業に入れなかった ・電波が悪く発表ができなかった ・教室での授業とは勝手が違って難しかった ・一人で考えるのは不安だった
回答数	23	4

表６「すうじのうた」の授業に対するアンケート結果

	プラス面・前向きな回答	マイナス面・後向きな回答
記述回答内容の一部	・すうじのうたを使って自分たちで考え何か発表するのは凄く楽しかった ・ペープサートを作りながらの替え歌発表は実習や現場での活動を想像しやすかった ・今度はすうじのうたの弾き歌いに挑戦したいと思った ・こどもの歌を歌うことが初めて楽しいと思えた ・みんなの発表を見て自分には思いつかないことが知れて良かった ・実習で使えると思うので忘れないようにしたい ・手遊びは五領域をバランスよく体験できると思えた	・家に工作の材料が無くて焦った ・自分だけの部屋がないのでカメラをオンにすることに少し抵抗があった ・電波が悪く授業に入れなかったので個人的にピアノの練習をしました ・いざオリジナルの歌詞を作るとなるとなかなか思いつかず大変だった
回答数	22	4

上記の通り、学生の授業アンケート結果にマイナス面の回答があったことは今後の課題として見逃すことはできないが、コロナ禍の急なオンライン授業への転換だったにもかかわらず、プラス面の前向きな回答が多く得られたことは大変喜ばしい結果であった。特に、表４～表６にも示した、『紙芝居で選んだ曲を弾けるようになりたい』や『今度はすうじのうたの弾き歌いに挑戦したいと思った』、『ピアノは苦手だけどこれからは頑張ろうと思った』などのアンケート記述に加え、時間の関係上、授業内では軽く触れることしかできなかった五領域についても、『手遊びは五領域をバランスよく体験できると思えた』など、一部の学生のみではあったが、そういった記述がアンケートに見られたことは、弾き歌い曲の学びと関連付けた紙芝居制作や手遊びの授業の試みにおいて、非常に有意義な結果となった。また、後に対面許可が下り行われた通常の個人レッスンにおいても、これらの結果を裏付けるかのように、弾き歌いの授業に積極的に参加する学生が明らかに増えたことは、筆者にとって大変貴重な成果となった。

尚、表４～表６の有効回答数の合計に誤差が生じたのは、授業欠席者にはアンケート調査が行えなかったためである。特に、オンライン授業に転換したばかりの週では、欠席者が多く見られ、授業を受けるための環境設備や準備が整っていなかったものと推測される。

Ⅳ．まとめ

今回、思いがけない事由ではあったが、オンライン授業への転換を機に実践した試みによって様々な学びや発見の機会、成果を得ることができた。また、弾き歌い曲に対する学生の意識変化はもちろん、学生個々の新しい一面も垣間見えた。

普段は大人しくあまり印象にない学生が、実は非常に絵心があり、紙芝居を通して生き生きと発表したこと、授業中の私語が多く常に注意を受けていた学生が、とても手先が器用で繊細且つ丁寧な作業をすると知り得たことなど、ピアノの指導をしていただけでは、

きっと気付くことはなかったであろう。

この研究を執筆し始めたころは、新型コロナウイルス感染症の第２波の収束に誰もが希望を持っていたが、第３波と呼ばれる大波の末、２度目となる緊急事態宣言の真っただ中である今、ワクチンの開発や段階的な接種に大いなる期待が高まる一方、教育現場でのオンラインと対面を組み合わせたハイブリッド型とも言える授業に、まだ終わりは見えそうにない。いや、それどころか双方の利点を生かしながら、こういった授業スタイルがスタンダード化していくかもしれない。

引き続き、学生に理解し易く満足度の高い授業をどのようにしたら展開していけるのか、そして、どのような状況下においても授業内容や質の担保に対し妥協してはならない、という意識を忘れず、筆者自身も日々学びを深めながら研究を進めていきたい。

引用文献

１）小林美実編 「続　こどものうた 200」 チャイルド社　2016 第 33 刷　p.101
２）３）小林美実編 「こどものうた 200」 チャイルド社　2016 年第 103 刷　p.98

参考資料・文献

名古屋こども専門学校 「音楽表現Ⅳ」シラバス　2020 年度版
名古屋こども専門学校　授業アンケート　2020 年度
文部科学省 「幼稚園教育要領」 平成 29 年告示第 62 号
神原雅之　鈴木恵津子編 「幼児のための音楽教育」 教育芸術社　2018 年第 1 刷
小林美実編 「こどものうた 200」 チャイルド社　2016 年第 103 刷
小林美実編 「続　こどものうた 200」 チャイルド社　2016 第 33 刷